富士宮市文化財調査報告書第44集

峯石遺跡 Ⅱ

－㈱駿河勧業開発による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012

富士宮市教育委員会

富士宮市文化財調査報告書第44集

峯石遺跡 Ⅱ

－㈱駿河勧業開発による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2012

富士宮市教育委員会

例　　言

1　本書は、静岡県富士宮市大岩字峯石910番に所在する峯石遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、㈱駿河勧業開発（代表取締役　室伏健志）による宅地造成工事に伴い、同社より調査の依頼を受けた富士宮市教育委員会が、㈱東日の支援業務をもって実施したものである。

3　発掘調査は、平成23年９月21日から同10月14日まで現地調査を実施して、調査面積はおよそ175㎡となった。同12月５日から整理作業、報告書作成作業を継続して平成24年６月30日に事業を完了した。

4　発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査主体者　佐野敬祥（平成23年度富士宮市教育委員会教育長）
　　池谷眞德（平成24年度同教育長）

調査担当者　馬飼野行雄（平成23年度富士山文化課主幹兼係長）
　　伊藤昌光（平成24年度同主幹兼係長）
　　渡井英誉（平成23・24年度主任学芸員）
　　保竹貴幸（同主査）
　　田中城久（同嘱託員）

支援業務員　小金沢保雄（㈱東日監督員）・渋谷政夫（同作業員・以下同じ）・古郡善明・
　　渡辺剛・渡辺敏雄・大平美奈子・山崎芙美子
　　佐藤節子（同整理作業員・以下同じ）・渡辺麻里

5　本書の執筆は、以下のとおりである。

保竹貴幸　第Ⅰ章１・２
田中城久　第Ⅰ章３～Ⅴ章

6　編集と写真撮影は、田中が行った。

7　本書の編集・印刷・出版に関する事務は、富士宮市教育委員会富士山文化課が行った。

8　発掘調査に関する全ての資料は、富士宮市教育委員会で保管している。

9　本報告書作成にあたり、堀内秀樹氏（東京大学准教授）に中近世に関するご指導・ご協力をいただいた。

凡　　例

1　調査区におけるグリッド設定は、調査区に合わせて任意に設定した。

2　挿図中に示す座標は、世界測地系を用いた測量値である。方位は真北を示している。標高は全て海抜高度をもって示し、単位はメートル（m）とする。

3　遺構の略号は次の通りである。

　　ＳＢ・・竪穴住居址　　ＳＫ・・土坑　　ＳＤ・・溝　　Ｐ・・柱穴等

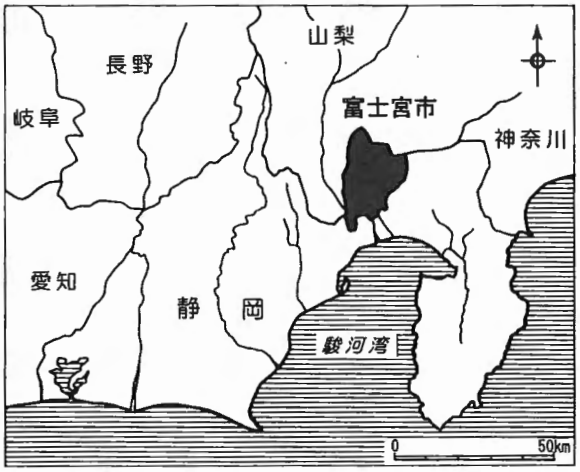
4　土器観察表の長さの単位はセンチメートル（ｃｍ）である。（　）は推定値を現す。

5　挿図中のトーンは、以下を表している。

撹乱　　焼土範囲

6　挿図の縮尺は各図中に示す通りである。

7　写真図版の縮尺は全て任意である。



目　　次

第Ⅰ章　はじめに
1　調査の経緯 …… 1
2　調査の経過 …… 1
3　調査区の設定 …… 3
第Ⅱ章　環　　境
1　地理的環境 …… 4
2　歴史的環境 …… 4
3　層　序 …… 8
第Ⅲ章　遺　　構 …… 10
1　竪穴住居（ＳＢ０１） …… 10
2　掘立柱建物（ＳＨ０１） …… 12
3　溝　（ＳＤ０１・０２） …… 13
4　土　坑（ＳＫ０１） …… 13
5　ピット（Ｐ１～３） …… 14
第Ⅳ章　遺　　物 …… 15
第Ⅴ章　ま と め …… 18

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図 …… 2
第２図　調査区・確認トレンチ配置図 …… 2
第３図　グリッド配置図 …… 3
第４図　遺跡周辺地質図 …… 5
第５図　周辺遺跡分布図 …… 7
第６図　標準土層図 …… 8
第７図　土　層　図 …… 9
第８図　遺構全体図 …… 10
第９図　ＳＢ０１実測図 …… 11
第10図　ＳＨ０１実測図 …… 12
第11図　ＳＤ０１・０２実測図 …… 13
第12図　ＳＫ０１、Ｐ１・２・３実測図 …… 14
第13図　出土遺物実測図 …… 15
第14図　ＳＢ０１遺物出土状況図 …… 16
第15図　平成20年度神祖遺跡調査遺構模式図 …… 18

挿　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 ……7
第２表　土器観察表 ……17

写　真　図　版　目　次

写真1　ＳＤ０１・０２検出状況
写真2　ＳＨ０１検出状況
写真3　ＳＤ０１・０２、ＳＫ０１完掘状況
写真4　ＳＨ０１完掘状況
写真5　ＳＢ０１検出状況
写真6　ＳＢ０１完掘状況
写真7　ＳＢ０１完掘状況
写真8　調査区遺構完掘状況
写真9　出土遺物①（１）
写真10　出土遺物②（17）
写真11　出土遺物③

第Ⅰ章　はじめに

峯石遺跡は、静岡県富士宮市大岩字峯石にあり、広範囲に広がる丘陵部の多い富士山の傾斜地に位置する。今回の発掘調査では、居住域集落跡の一部が発見された。

１．調査の経緯

この度の発掘調査の起因となったのは、㈱駿河勧業開発（代表取締役　室伏健志）が計画する宅地分譲地造成工事が、遺跡北辺の富士宮市大岩字峯石910番、946.06㎡に計画されたことによるもので、周知の埋蔵文化財包蔵地内での土木工事として、平成23年４月13日付けで、文化財の所在の有無について照会がされた。

これを受け、富士宮市教育委員会（以下、市教委）は平成23年５月16日から同25日まで遺跡の確認調査を実施して、主に弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる住居跡、ピット、溝状遺構を検出したため、同年６月７日付け、富教文第23号の３で、文化財が所在していることを回答した。

この回答をもって、㈱駿河勧業開発は市教委と効果的な遺跡保存ための検討を重ね、保存の不可能なおよそ175㎡を調査対象予定地として、平成23年８月26日付けで、静岡県教育委員会（以下、県教委）教育長宛に埋蔵文化財発掘の届出書を提出した。

これを受けた県教委は平成23年９月７日付けで、土木工事等のための発掘に係る指示について、保存が不可能なおよそ175㎡に対して本発掘調査を、残り部分を市教委による工事立会いを実施することを通知した。これを受け㈱駿河勧業開発は㈱東日と埋蔵文化財の発掘調査支援業務の委託契約を締結し、市教委に埋蔵文化財発掘調査依頼書を同年９月14日付けで提出した。

市教委は㈱駿河勧業開発、㈱東日と「富士宮市峯石遺跡埋蔵文化財発掘調査等に関する協定書」を締結し、市教委が主体となり、発掘調査を実施することとなった。

２．調査の経過

発掘調査は市教委が主体となり、平成23年９月21日から開始した。表土から暗褐色土・黒色土層を除去しながら、遺構構築面を追及したが調査区東側は、遺構確認面の大沢ラピリ層が削平されて、表土直下でクロボク層が堆積している状態だった。

調査の全体の経過は以下のとおりである。

９月21日（水）

事前に設置した現場休憩所に器材搬入。

９月22日（木）

重機による表土排除作業、遺構の精査作業開始

９月26日（月）

グリッド設定・基準杭打ち込み、遺構覆土排除作業、遺構の精査

９月27日（火）～９月28日（水）

上層の遺構覆土排除作業、遺構調査、遺構実測。

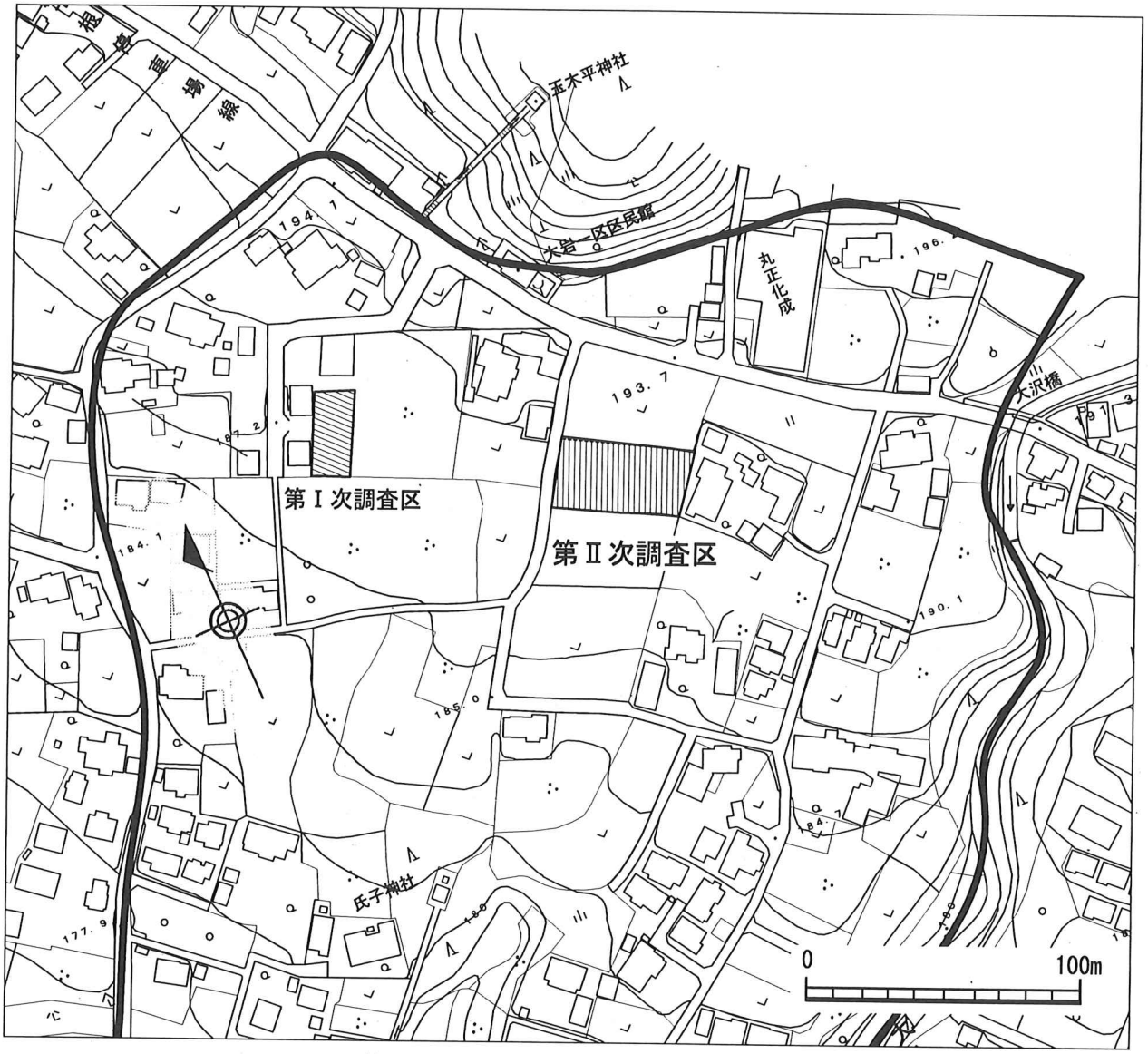
９月29日（木）

上層の遺構全景写真撮影、下層遺構の精査

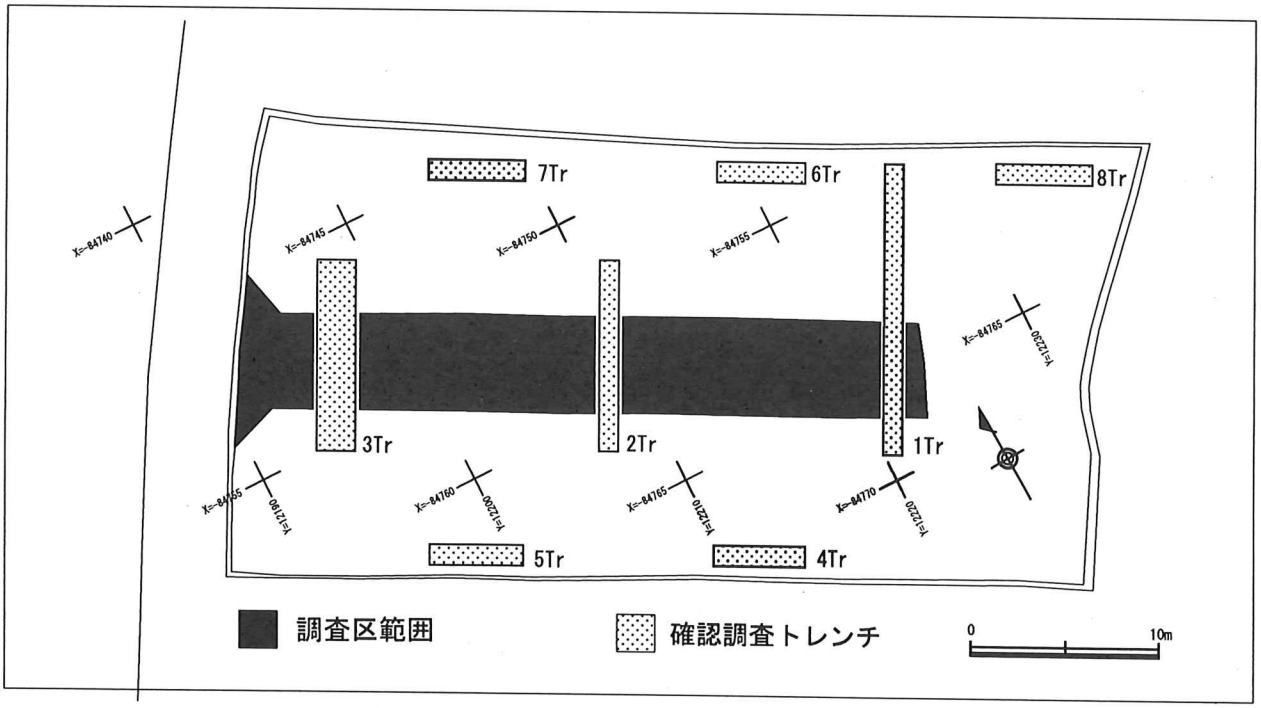
９月30日（金）

調査区中央付近で縄文確認トレンチと東西断割りトレンチを「コの字状」に設定、掘削。下層の遺構を確認するため上層遺構面土層を排除掘削。

10月３日（月）～10月６日（木）



第１図　調査区位置図（１：2500）



第２図　調査区・確認トレンチ配置図（１：400）

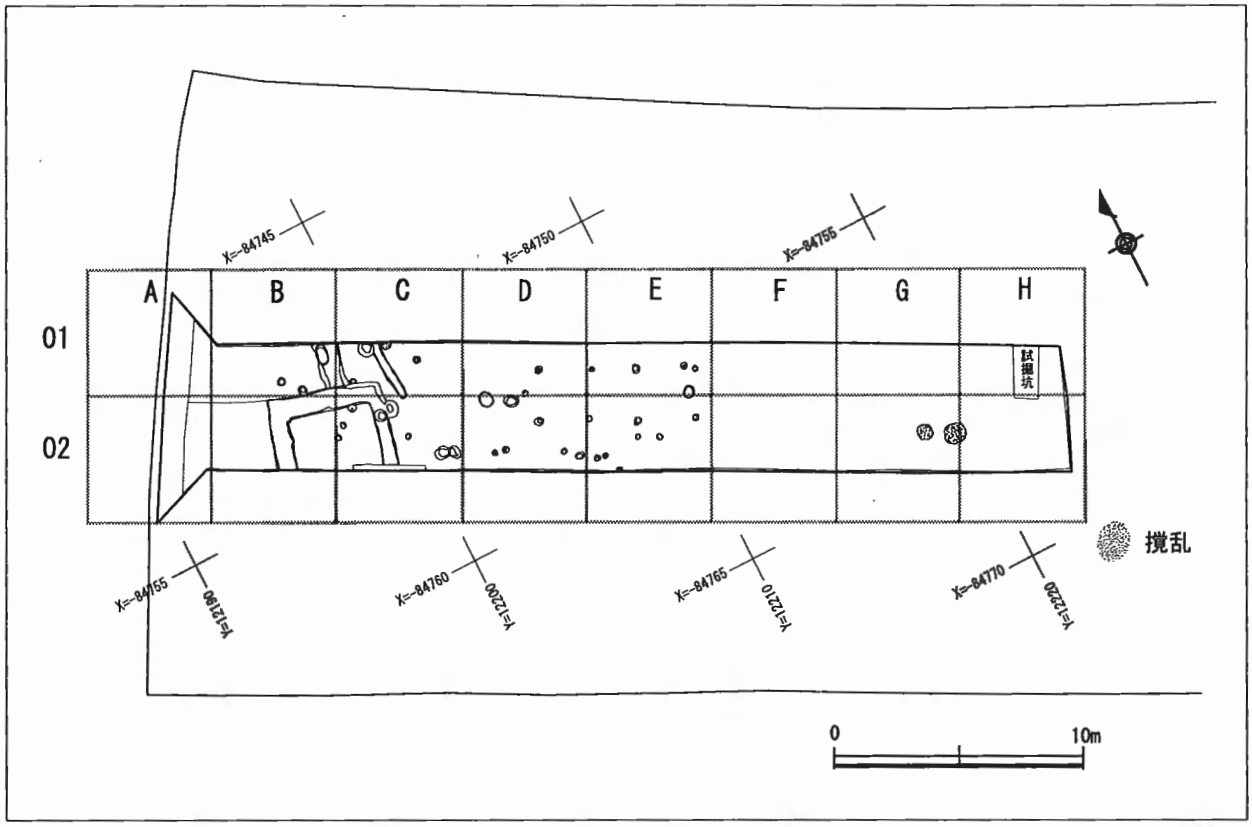
下層の遺構覆土排除作業、遺構調査、遺構実測。
10月７日（金）
下層の遺構全景写真撮影、器材撤収
10月11日（火）
調査区壁実測、器材メンテナンス作業
10月12日（水）
調査区遺構測量（㈱東日による）
10月13日（木）
調査区遺構測量、重機による埋め戻し作業
10月14日（金）
現場休憩所、トイレ、安全柵撤収

現地における発掘調査の終了後、出土文化財は平成23年11月25日付けで、県教委教育長宛に埋蔵文化財保管証を、同年11月25日付けで富士宮警察署長に埋蔵物の発見届を提出し、同年12月８日付け、教文第1219号で埋蔵文化財の認定を受けた。以後、富士宮市教育委員会富士山文化課文化財整理室において整理作業を実施し、本書の発刊をもって発掘調査全体の事業を完了している。

３．調査区の設定（第３図）

調査区は東西35m、幅５mの中央道路建設予定地である。これにあわせて５m×５mに設定し、東西にアルファベッド、南北に数字列を用い、グリッドは左上交点をもってグリッド名とした。

それにより、A～H、１～２まで16グリッドが対象となった。また、国家座標（世界測地系・平面直角座標第Ⅷ系）上の位置は、Ｂ２杭がX＝－84749.313・Y＝12193.648、Ｈ２杭がX＝－84763.062・Y＝12220.346を示している。



第３図　グリッド配置図（１：300）

第Ⅱ章　環　境

１．地理的環境

富士宮市は富士山の西南麓に位置し、面積は388.99ｋ㎡である。東西は20.92ｋｍ、南北は32.63ｋｍに及んでいる。海抜は最高が富士山頂の3,776m、最低が山本石の宮地区の35mで、3,741mの日本一の比高差を誇る。また、市内のほぼ全域は富士山頂から傾斜する山麓となっており、峯石遺跡の所在する富士根地区も例外でない。立地は富士山から広がる丘陵上に広がり、弓沢川左岸の平坦地が形成され、遺跡周辺は富士宮市内で屈指の遺跡密集域を誇る。眼下には富士宮市街地の沖積平野を望み、対岸の白尾・明星山丘陵を眺め、西には天守山地、羽鮒丘陵が取り囲んでいる。南に目を転じれば駿河湾、伊豆半島の山々が見られ、潤井川で富士宮市と開きつながれ、山梨県へ抜けるルートの一部として利用されている。

富士宮市内の大部分は富士山の火山活動の影響を強く受けている。富士山の成立過程は、小御岳、古富士、新富士という火山活動により形成されている。最近の調査では小御岳の前に先小御岳が存在したことが指摘されている。古富士火山は小御岳火山の南西麓を火口とし、その噴出物は小御岳火山の大部分を覆い、小御岳火山は北側中腹にその火口丘を残すだけとなっている。浸水性のある新富士火山噴出物と不透水性の古富士火山堆積物の間からは数多くの湧水が湧き出しており、その様子は市内各地で見られる。峯石遺跡のある大岩含め周辺の小泉、杉田の地域も富士火山溶岩流の流出末端部にあたり、いわば富士山の裾部で数多くの湧水が確認できる。これらの湧水地が先に述べた弓沢川左岸の遺跡密集域を形成する要因にあげられる。

また、富士山南西部の羽鮒・星山丘陵には古富士火山の堆積物が分布しており、その堆積物は古富士泥流と呼ばれている。約10万年前～５万年前の堆積物は、羽鮒丘陵の南西斜面の標高350～200m、星山丘陵の南東斜面標高200～150mの平坦面に分布している。市内の古富士火山堆積物の大部分は新富士火山の噴出物に覆われているが、両丘陵は断層運動によって隆起したために地表に残されたものである。約５万年前～２万年前の堆積物は侵食によって削られた星山丘陵の谷を埋め、標高160～70mの２段の地形面をつくっており、星山丘陵の北東を流れる潤井川沿いや白糸の滝から狩宿間の芝川沿いでも見られる。約２万年前の古富士火山の終期には、山体が南西に向かって斜面崩壊する岩屑なだれが起きており、その堆積物は田貫湖周辺の標高650～400mの丘陵や元村山から小泉にかけての標高550～100mの範囲に分布している。新富士火山の噴出物は多量の溶岩流が特徴で、約17,000年前～8,000年前にかけて、丘陵地や富士川以西を除くほぼ全域に流下している。この大規模な溶岩流を噴出したあと約8,000年前～5,600年前は活動が低下して小規模な噴火となる。市内の縄文時代の包含層である黒色土層の大部分はこの時期に形成されている。ついで約5,600年前～3,700年前には山頂及び山腹から数多くの溶岩が流れている。約3,500年前～2,300年前には山頂及び山腹での爆発的な噴火があり、この時期に市内各地で見られる堅いラピリ層を形成する大沢スコリアが降下している。約2,300年前からは山頂での噴火は起きなくなり、山腹での割れ目噴火が中心となる。峯石遺跡を含む富士山南西麓の遺跡群は、これらの火山活動に影響され、特徴的な各時代の消長を投影することになる。

２．歴史的環境

峯石遺跡は縄文時代前期～後期と古墳時代、奈良時代が周知される遺跡である。第Ⅰ次調査（平成５年度実施）では、縄文時代前期の竪穴住居１基、集石遺構３基、奈良時代の竈を伴う竪穴住居１基が検出された。遺物は遺構内に関して、縄文時代の竪穴住居内から縄文前期の清水ノ上Ⅰ式土器、磨石、凹み石、台石、円礫、石鏃の石器が出土している。石器の組成から礫石器類が多く、採集に食の依存を求めていた様相がわかった。また奈良時代の竪穴住居からは、いわゆる駿東型の甕が出土している。遺構外の遺物に

原図　国土地理院 2003『富士山』1:50,000火山土地条件図

0　3km

<凡例>

- 峯石遺跡
- 雪代堆積地・火山麓扇状地(現成)
- 側火山
- 富士火山新期溶岩流（約2,300年前以降に噴出した溶岩流）
- 富士火山旧期溶岩流（約2,300年以前に噴出した溶岩流）
- 富士火山火山麓扇状地
- 古富士泥流堆積地
- 谷底平野・氾濫原
- 急崖
- 河岸段丘
- 崖錐
- 扇状地・緩扇状地
- 第三紀や第四紀の地層からなる山地や丘陵地
- 愛鷹山火山

第４図　遺跡周辺地質図（１：100,000）

関して、神ノ木式土器、無文土器、関山Ⅰ式土器、清水ノ上Ⅰ式土器、加曾利E4式土器の縄文早期末、前期と中期のものが出土し、石器では敲石、石斧、石匙、石錐、玦状耳飾りが出土している。（富士宮市教育委員会1994）

周辺の遺跡に目を向けると、峯石遺跡の北側に位置する箕輪Ａ遺跡で縄文時代後期の竪穴住居２基と、縄文時代中・後期の遺物が、箕輪Ｂ遺跡からは、縄文時代前期の竪穴住居1基と、縄文時代早期～後期の遺物が出土している。辰野遺跡では縄文時代早期、後期～晩期の遺物が発掘調査で出土している。これらにあげた縄文時代早期の広がりは特筆に値し、市域に視野を広げれば、縄文時代早期に該当する遺跡の数が増加して、先の時代、草創期にあたる国指定史跡大鹿窪遺跡に代表されるように羽鮒丘陵西側に営まれたものが、その主体を潤井川中流域へと移っていく。小泉地区では表裏縄文土器・撚糸文土器・押型文土器を伴う多数の住居跡が出土した若宮遺跡、撚糸文土器、押型文土器、条痕文土器、沈線文土器が出土した代官屋敷遺跡があり、石敷遺跡からは撚糸文土器・相木式土器併行の押型文土器・田戸上層式土器併行・判ノ木山西式土器の沈線文土器が、上石敷遺跡から早期後葉の撚糸文土器・野島式土器がそれぞれ出土している。

峯石遺跡の南側に目を向ければ、市内屈指の古墳時代を中心とする遺跡が広がっている。嚆矢となる弥生後期の遺跡は、後期後半の石敷遺跡で確認されている。市域の弥生後期遺跡の主要な分布は、潤井川をはさんで対岸の星山丘陵上に展開しており月の輪上遺跡、滝戸遺跡や、滝戸遺跡に隣接する沖積地の泉遺跡に代表される。特に泉遺跡で検出された環濠は弥生後期後半で埋められたことがわかっており、それを期に石敷遺跡へと小泉地区へ集落開発が進む変遷は、集落が山間地へと進出する東日本の傾向と同調する。

古墳時代前期では丸ヶ谷戸遺跡の前方後方型周溝墓（全長26.2m）の登場に象徴されるように大岩・小泉地域の開発が始まる。調査では前方後方型周溝墓の他に大型の竪穴住居と方形周溝墓が検出されているが、方形周溝墓を構築するために竪穴住居が意図的に埋め戻されていることがわかり、墓の葬送儀礼にかかる行為と考えられている。また丸ヶ谷戸遺跡に近い三ツ室遺跡における発掘調査で、屋内中央に棟持ち柱を擁する特殊な竪穴住居が検出され、同じく隣接する神祖遺跡では一辺873ｃｍの大型竪穴住居と特殊な遺物がみられる。このように丸ヶ谷戸遺跡を含む遺跡群が、一般集落と異なる様相をもつことは注意が必要であろう。

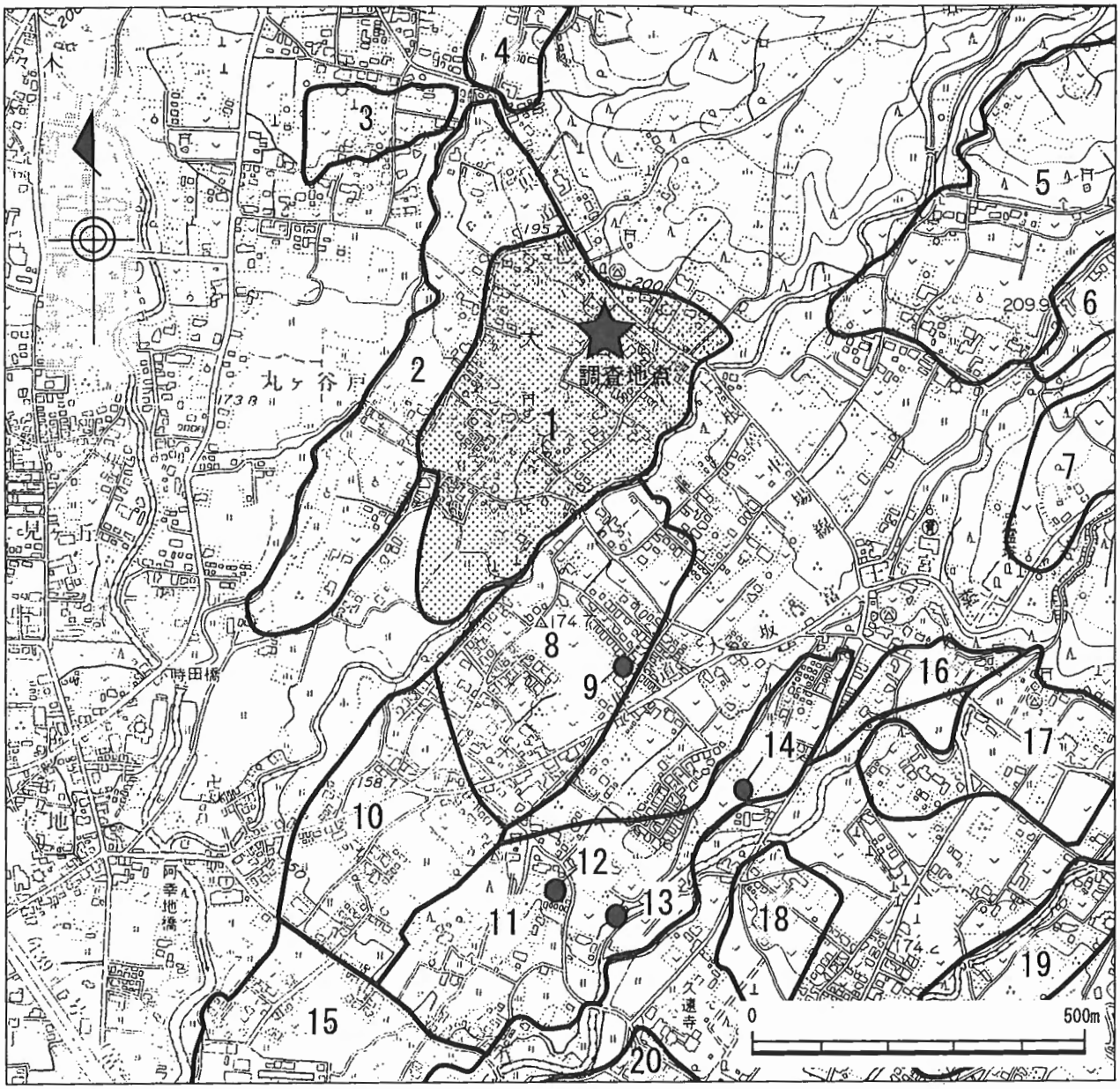
古墳時代中期になると集落の分布が大岩・小泉地区から確認されなくなり現在の市街地に集落を移すと考えられる。浅間大社遺跡、大宮城跡からそれぞれ竪穴住居が検出されている。

古墳時代後期になると小泉地区に大室古墳、神祖山ノ神古墳の古墳群が造営される。大室古墳は径９～10mを測る円墳で、７世紀の築造と考えられている。南西側に開口する石室が露呈している。これに対応する集落が木ノ行寺遺跡、中沢遺跡と考えられる。木ノ行寺遺跡から７世紀前半の竪穴住居が発掘調査で確認されている。集落、古墳と古墳時代中期に分布が認められなかった空白をかき消すかのように再度、この地域は開発される。ただし、集落の中心は峯石遺跡より沖積平野に近い弓沢川下流域で展開されることになる。この点、後に続く奈良時代の遺構も近辺の上石敷遺跡で確認されているが、先に述べた峯石遺跡Ⅰ次調査でも奈良時代の竪穴住居が検出され、今回新たに検出された古墳時代前期の遺構について検討課題になると思われる。

《文献》

富士宮市教育委員会1994『峯石遺跡』

富士宮市教育委員会2010『代官屋敷遺跡Ⅱ』



第５図　周辺遺跡分布図（１：10,000）

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	峯石遺跡	縄文(前～後)、古墳、奈良	11	神祖遺跡	縄文(早・中)、古墳
2	丸ヶ谷戸遺跡	縄文(中・後)、弥生、古墳、中世	12	神祖3号墳	古墳(後)
3	時田遺跡	縄文(中・後)、古墳	13	神祖2号墳	古墳(後)
4	辰野遺跡	縄文(早・中～晩)、弥生(中)、古墳	14	神祖山ノ神古墳	古墳(後)
5	箕輪A遺跡	縄文(中・後)、古墳	15	木ノ行寺遺跡	縄文(中・後)、古墳、奈良
6	箕輪B遺跡	縄文(早～後)、古墳	16	出水西遺跡	古墳(前)
7	滝沢遺跡	縄文	17	出水遺跡	縄文(前・中)、古墳
8	大室遺跡	縄文(中・後)、古墳	18	寺ノ後遺跡	縄文(中)
9	大室古墳	古墳(後)	19	出水東遺跡	縄文、古墳(前)
10	三ツ室遺跡	縄文(前)、古墳(前)	20	寺内遺跡	縄文(前・中)、古墳

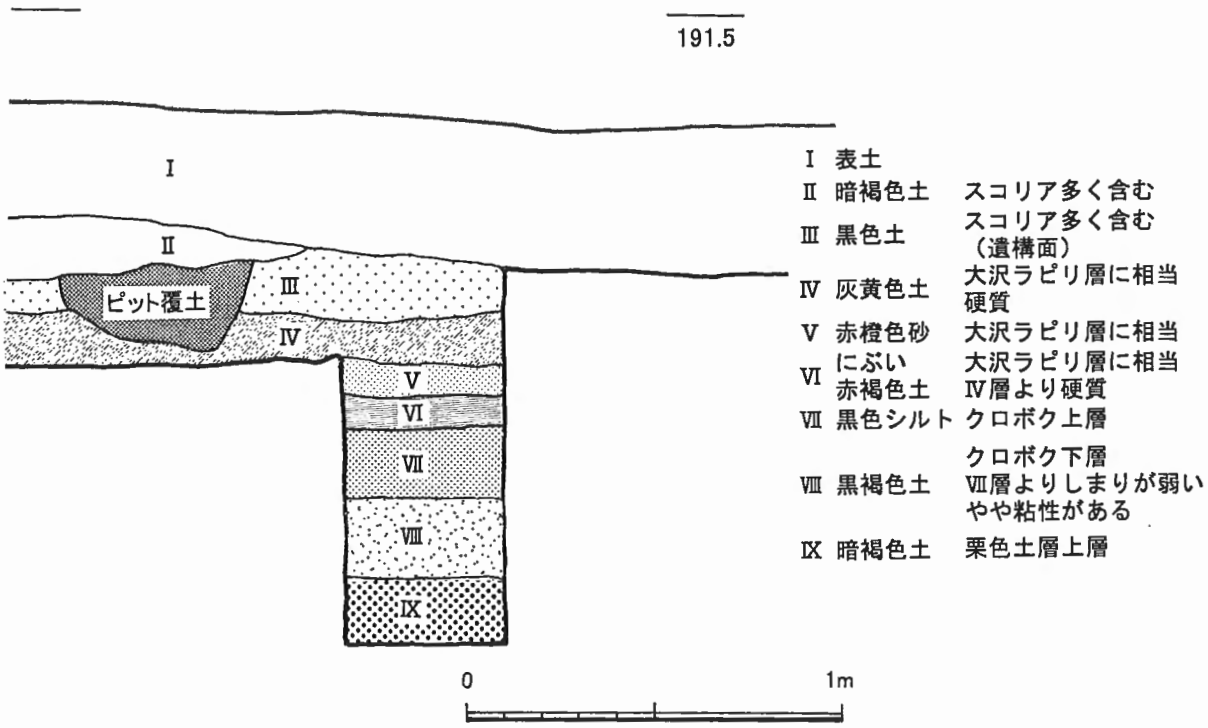
第１表　周辺遺跡一覧表

３．層　序

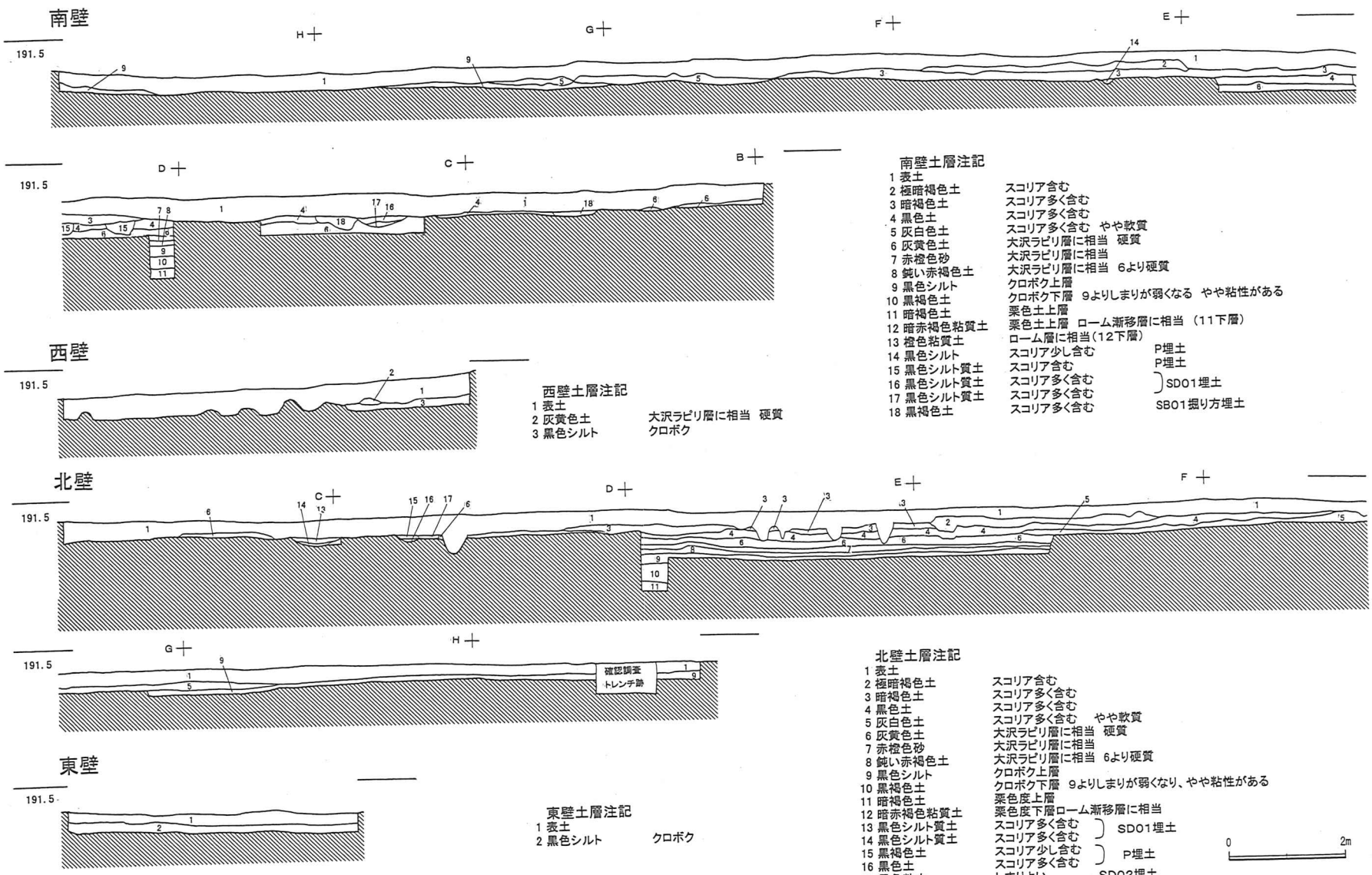
峯石遺跡における今回の発掘調査地点では、弓沢川左岸域の富士山裾部丘陵上地形における下記のような基本土層が認められた。

第Ⅰ層　表土層（耕作土）
第Ⅱ層　暗褐色土層
第Ⅲ層　黒色土層　遺構面
第Ⅳ層　灰黄色土層　大沢ラピリ層に相当
第Ⅴ層　赤橙色砂層　大沢ラピリ層に相当
第Ⅵ層　にぶい赤褐色層　大沢ラピリ層に相当
第Ⅶ層　黒色シルト　クロボク上層
第Ⅷ層　黒褐色土層　クロボク下層
第Ⅸ層　暗褐色土　栗色土層上層

調査区は埋没谷にかかるところにあり、第Ⅱ、Ⅲ層が谷部の堆積土になっていた。周辺遺跡のように表土下に大沢ラピリ層（第Ⅳ層）の層序とは異なる様相を呈している。



第６図　標準土層図（南壁Ｃ・Ｄグリッド）（１：20）



南壁土層注記

1 表土		
2 極暗褐色土	スコリア含む	
3 暗褐色土	スコリア多く含む	
4 黒色土	スコリア多く含む	
5 灰白色土	スコリア多く含む　やや軟質	
6 灰黄色土	大沢ラピリ層に相当　硬質	
7 赤橙色砂	大沢ラピリ層に相当	
8 鈍い赤褐色土	大沢ラピリ層に相当　6より硬質	
9 黒色シルト	クロボク上層	
10 黒褐色土	クロボク下層　9よりしまりが弱くなる　やや粘性がある	
11 暗褐色土	栗色土上層	
12 暗赤褐色粘質土	栗色土上層　ローム漸移層に相当（11下層）	
13 橙色粘質土	ローム層に相当（12下層）	
14 黒色シルト	スコリア少し含む	P埋土
15 黒色シルト質土	スコリア含む	P埋土
16 黒色シルト質土	スコリア多く含む	SD01埋土
17 黒色シルト質土	スコリア多く含む	SD01埋土
18 黒褐色土	スコリア多く含む	SB01掘り方埋土

西壁土層注記

1 表土		
2 灰黄色土	大沢ラピリ層に相当　硬質	
3 黒色シルト	クロボク	

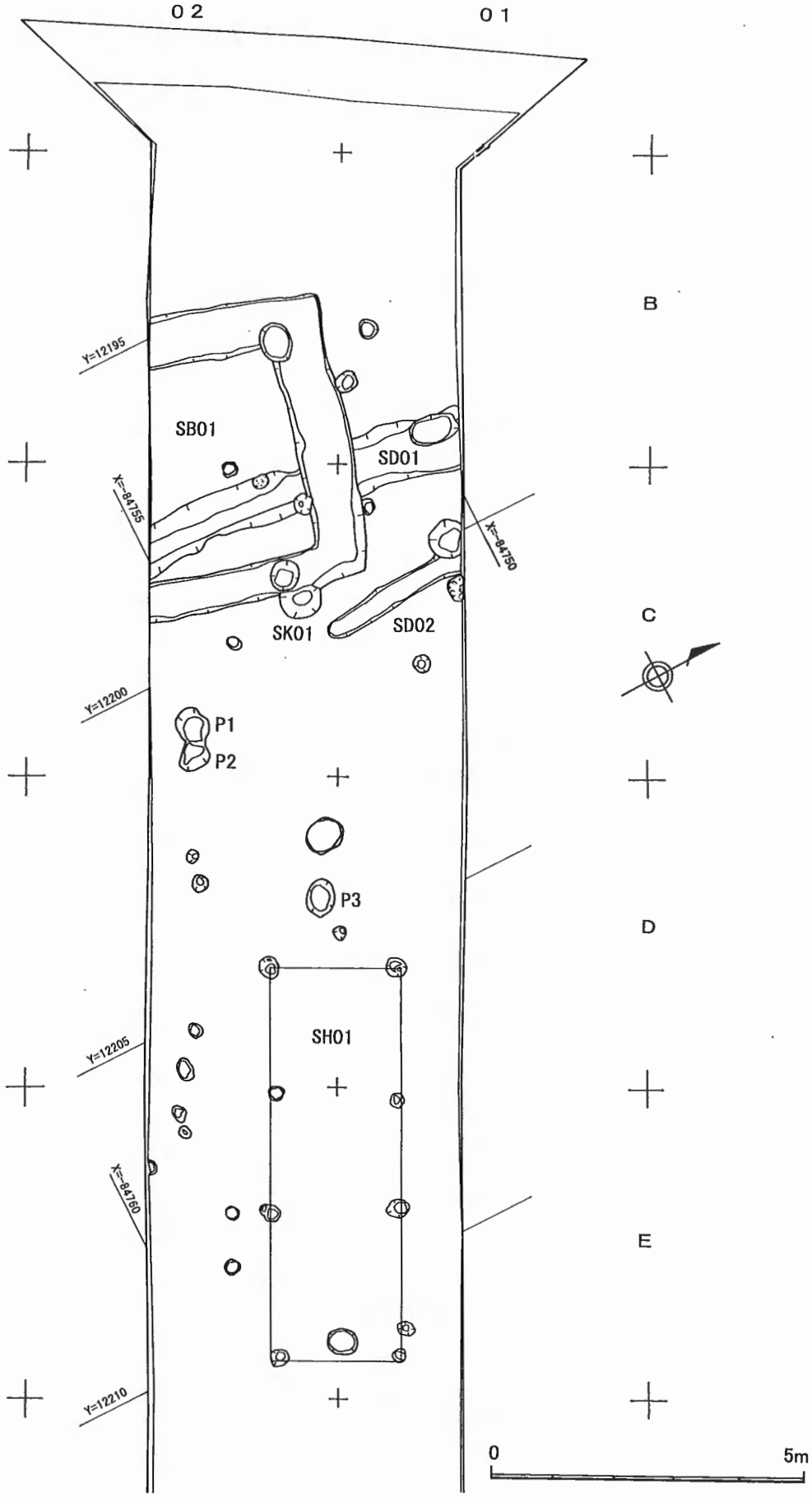
北壁土層注記

1 表土		
2 極暗褐色土	スコリア含む	
3 暗褐色土	スコリア多く含む	
4 黒色土	スコリア多く含む	
5 灰白色土	スコリア多く含む　やや軟質	
6 灰黄色土	大沢ラピリ層に相当　硬質	
7 赤橙色砂	大沢ラピリ層に相当	
8 鈍い赤褐色土	大沢ラピリ層に相当　6より硬質	
9 黒色シルト	クロボク上層	
10 黒褐色土	クロボク下層　9よりしまりが弱くなり、やや粘性がある	
11 暗褐色土	栗色度上層	
12 暗赤褐色粘質土	栗色度下層ローム漸移層に相当	
13 黒色シルト質土	スコリア多く含む	SD01埋土
14 黒色シルト質土	スコリア多く含む	SD01埋土
15 黒褐色土	スコリア少し含む	P埋土
16 黒色土	スコリア多く含む	P埋土
17 黒色粘土	しまりよい	SD02埋土

東壁土層注記

1 表土	
2 黒色シルト	クロボク

第７図　土層図（１：100）

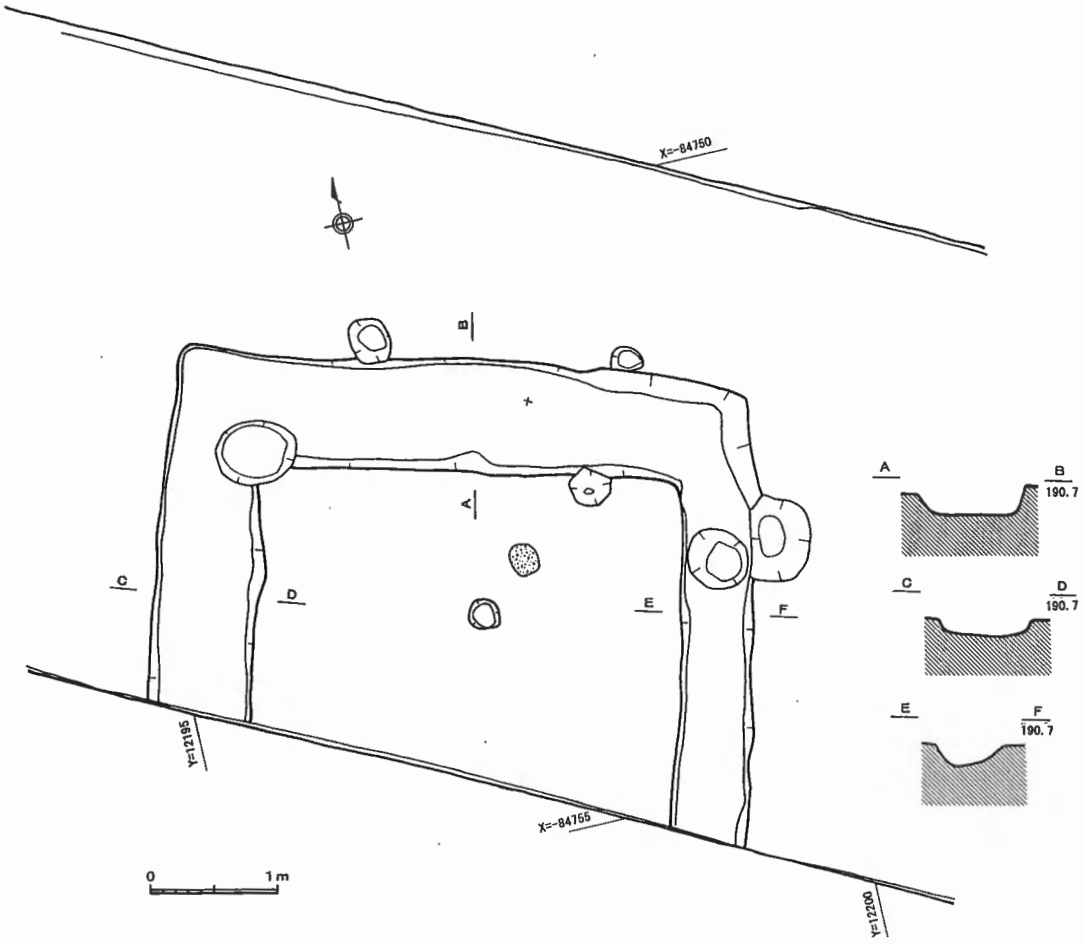


第８図　遺跡全体図（１：100）

本調査では竪穴住居１基、掘立柱建物１棟、土坑１基、溝２条、ピット26基（掘立柱建物柱穴除く）が検出された。

１．ＳＢ０１（竪穴住居　第９図）

ＳＢ０１はＢ０１、０２、Ｃ０１、０２グリッドの範囲で確認された。後世の土地改造と思われる削平で床面まで欠損が及んでおり、貼床掘り方のみの検出となった。重複はＳＤ０１、ＳＫ０１が住居面を削って新しい関係にある。住居は南側一部が調査区外になり、掘り方は、一辺の長さは485ｃｍを測り、主軸方位Ｎ－16°－Ｅを示す。確認で断割った南壁の観察においても、立ち上がり硬化面は確認されなかったので床面まで削平されたことが証明された。掘り方の平面形は現状「コの字状」形を呈しており、幅55ｃｍ～95ｃｍにわたり、深さ10～22ｃｍである。覆土は黒褐色土のスコリアを多く含む充填された単層の堆積状況で、平面は緩やかな逆台形状である。掘り方の分類だが、植松の研究（植松1981）



第９図　ＳＢ０１実測図（１：60）

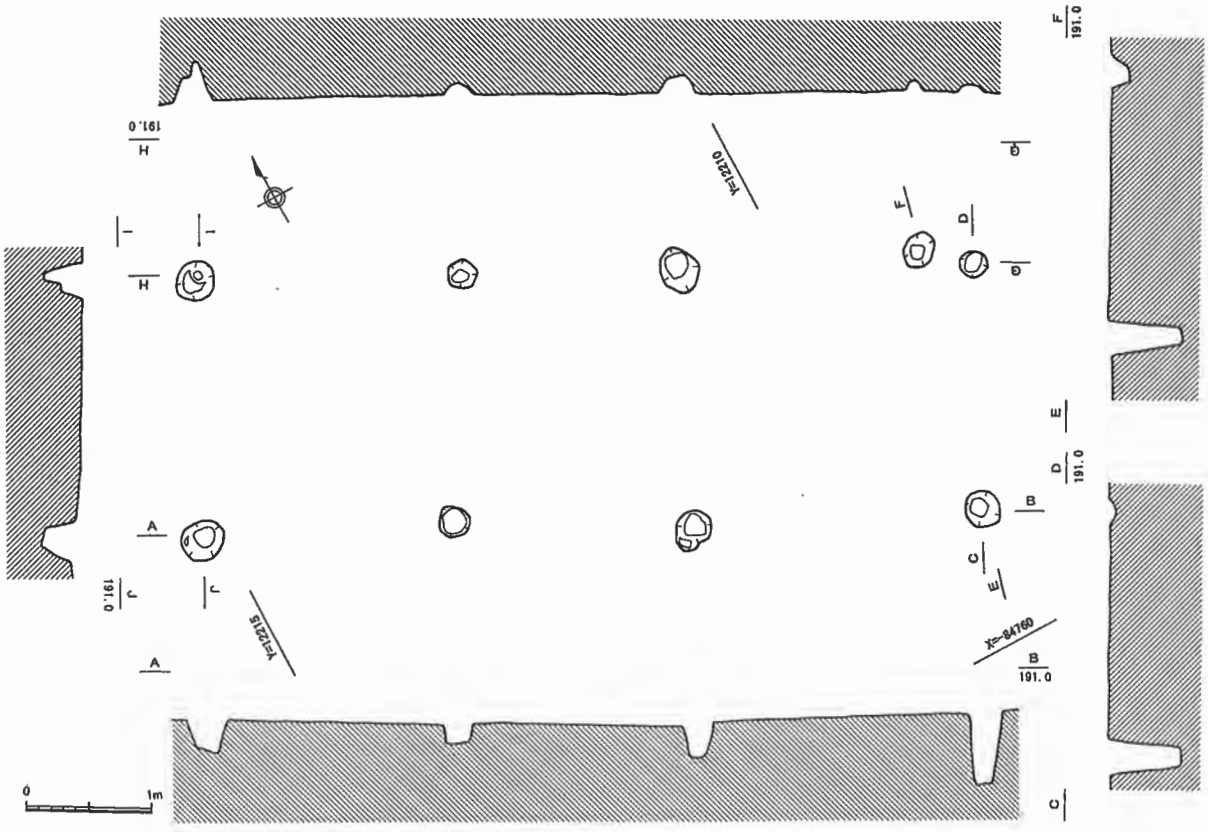
でいうＡ類が濃厚だが、立ち上がり壁が欠損しているのでＢ類の可能性もあり、明確に判断をくだすことができない。次に焼土の広がりは、住居北寄りに1箇所確認され、平面楕円形の28ｃｍ×22ｃｍを測り、深さ５ｃｍに及んでいた。ＳＤ０１によって削平され残存状況は極めて悪く、焼土面は幾度も焚かれた様子はうかがわれなかった。一方で住居床面が削平された兼ね合いから、地床炉の一部と考えたほうが蓋然性はある。続いて主柱穴と考えられるものは、東西の掘り方内でそれぞれ検出された。東側の柱穴は平面円形で38ｃｍ×36ｃｍ、深さ29ｃｍを測り、覆土は黒色土でスコリアが多く含まれるものである。遺物はＳ字甕の体部破片が出土している。西側の柱穴は北側掘り方のコーナに位置し、一部遺構面にあたる黒色土面を掘り込んでいる。平面楕円形で63ｃｍ×52ｃｍ、深さ12ｃｍを測り、黒色土でスコリアを多く含む覆土である。遺物は出土していない。両柱穴の並びは掘り方の「コの字状」の軸から見れば整然としない状況である。住居に伴う遺物は土師器類（第13図１～７）が出土しており、多くは掘り方内に集中する。レベル位置から見ると掘り方覆土内や底面から出土したものは少ない特徴が示されている（第14図）。このことから、遺物の多くは掘り方直上か、わずかに残っていたと思われる床面から出土したと考えられる。時期は、出土遺物から古墳時代前期に比定される。

《文献》

植松章八1981『月の輪遺跡群』「Ⅲ　住居址床面の二重構造について」

２．ＳＨ０１（掘立柱建物　第10図）

調査区中央のＤ０１、０２、Ｅ０１、０２グリッドに位置する。重複関係はなく、主軸方位Ｎ－27°－Ｅを振る。構造は、桁行（南北）１間、梁行（東西）３間の側柱建物であるが、調査範囲の幅が狭いため、調査区外へ展開する可能性もある。９基の柱穴で構成され、南北の規模は210ｃｍ、東西で620ｃｍを測る。

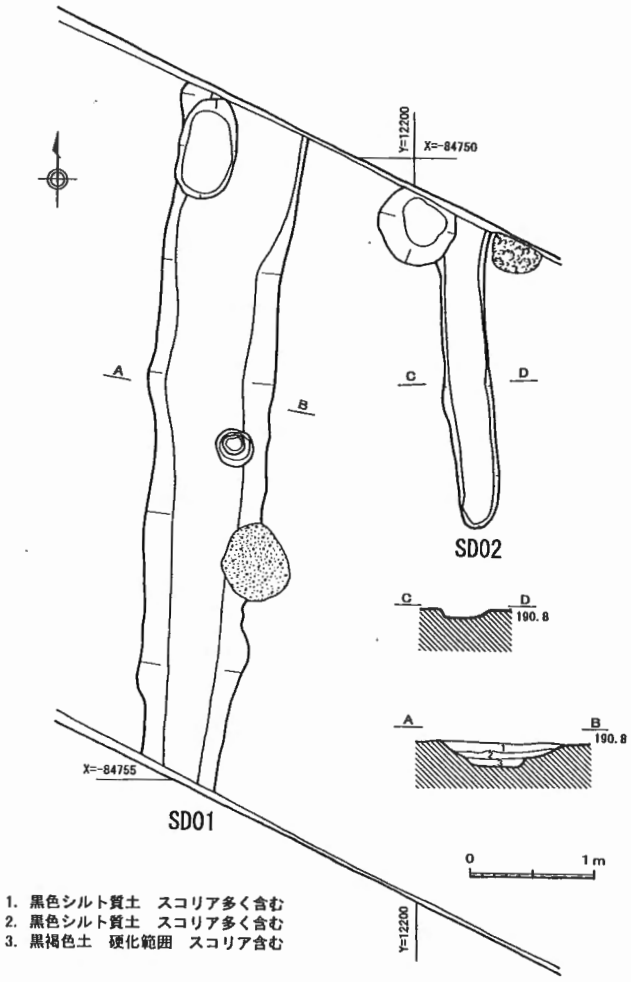


第10図　ＳＨ０１実測図（１：60）

東西の柱穴間は170～230ｃｍの範疇で、幅は一様の規格でない。柱穴内の覆土は黒色土で、中央部がしまり弱い土質の特徴が認められ、柱痕の残されているものとうかがえたが、土色の区別はが判然とせず、可能性だけにとどめたい。全ての柱の平面形は円形で、径20～36ｃｍの間を測るが、東辺南に位置する柱穴だけは深く掘り込まれ、55ｃｍを測る。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。層位的状況では、建物は、調査区中央に堆積する灰白色土層（第７図南壁５、北壁５）から検出されている。ＳＢ０１が検出された遺構面第Ⅲ層より下層であることが北壁の観察で判明した。この灰白色土層は標準土層第Ⅳ層に酷似しており、ラピリ層の割には軟質の土質以外、見極めが難しかった層である。埋没谷上で遺跡が形成されている不安定さから古墳時代前期の遺構面と同位層での検出かは、最後まで見極めができず、判然としなかった。

３．ＳＤ０１（第11図）

ＳＤ０１は、Ｂ０１、０２、Ｃ０１、０２グリッドに位置する。重複関係はＳＢ０１を削っている。主軸方位Ｎ－７°－Ｅを振り、やや南北方向に向かって走っており調査区外に延びる。検出された長さ521ｃｍ、上端63～105ｃｍ、下端で27～82ｃｍ、深さは10～17ｃｍを測る。断面は逆台形を呈する。底面は、かなり締まった硬化面が確認された。焼土面は１箇所確認でき、平面は楕円形で、長径60ｃｍ、短径49ｃｍを測り、深さは11ｃｍに及ぶ。溝が廃絶され堆積したところに焼土が形成された関係を示している。覆土はスコリアを多く含む黒色シルト質土で、人為的に埋められた堆積が認められる。出土遺物は土師器片が出土しているが細片のため、重複関係にあるＳＢ０１の攪拌と考えられる。図化できるものはなかった。溝は底面全体が硬化しており、人か畜獣で踏みしめられた所見がうかがわれ、道路的な性格が推測される。帰属時期は、ＳＢ０１を削っている関係から古墳時代以降と考えられる。



第11図　ＳＤ０１・０２実測図（１：60）

４．ＳＤ０２（第11図）

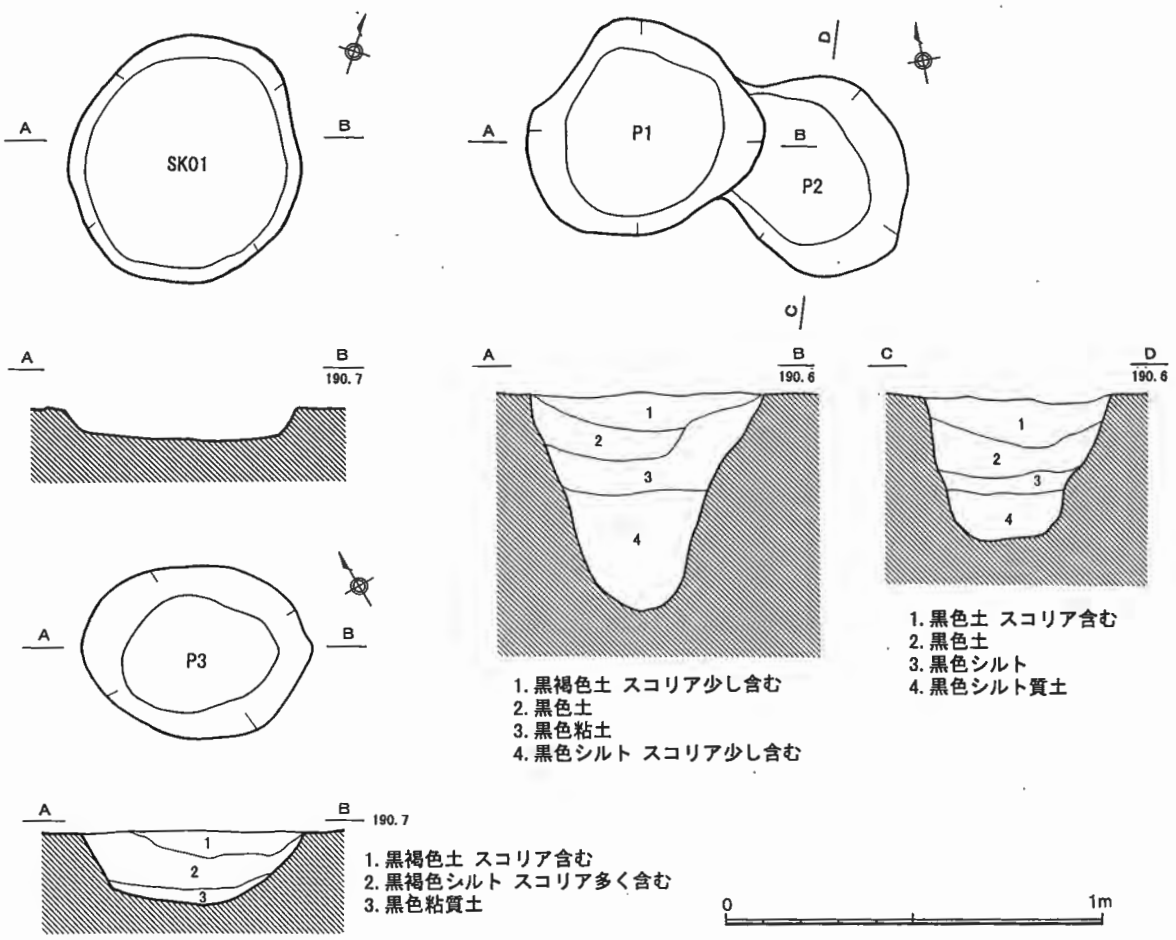
Ｃ０１、０２グリッドに位置する。重複関係は北側に位置するピットを削っている。主軸方位はＮ－５°－Ｗを振り、北に走る。ＳＤ０１と並行するが比較して若干西軸を振っている。長さ249ｃｍ、幅25～40ｃｍ、深さは10ｃｍを測る。断面は緩やかな半円形を呈する。覆土は黒色粘土で、人為的に埋められた堆積状況である。出土遺物はない。時期はＳＤ０２が削ったピット遺構から古墳時代の土師器片が出土しており、古墳時代以降のものと考えられる。

５．ＳＫ０１（第12図）

ＳＫ０１はＣ０２グリッドに位置する。重複関係はＳＢ０１を削っている。平面は円形で、長径67ｃｍ、短径62ｃｍ、深さは10ｃｍを測り、断面は緩やかな逆台形を呈する。覆土は黒色シルト質土で人為的な堆積が認められる。出土遺物はなく、ＳＢ０１を切ることから古墳時代以降のものと思われる。

６．Ｐ１・Ｐ２（第12図）

Ｃ０２グリッドに位置する。重複関係はＰ１がＰ２を削っている。Ｐ１の平面はやや不整な円形で、長径60ｃｍ、短径52ｃｍ、深さ59ｃｍを測り、断面緩やかなＶ字状を呈する。Ｐ２は平面円形で径50ｃｍ、深さ37ｃｍ、断面Ｕ字状を呈している。覆土はＰ１でスコリアを少し含む黒褐色土、Ｐ２はスコリアを含む黒色土である。いずれも版築状に充填されたと思われる。共に出土遺物はなく、時期は不明である。



第12図　ＳＫ０１　Ｐ１・２・３実測図（１：20）

７．Ｐ３（第12図）

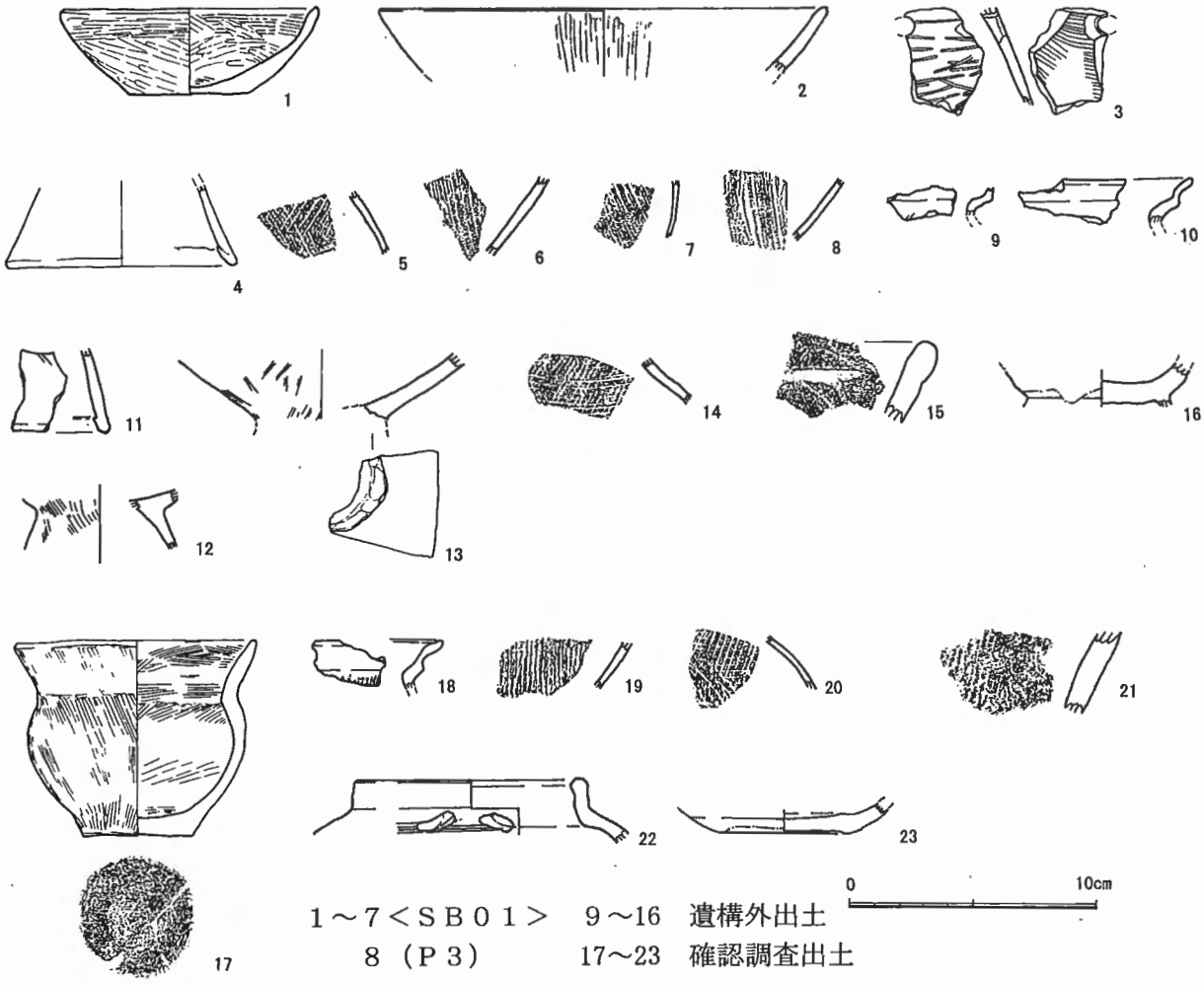
Ｄ０２グリッドに位置する。重複関係はなく、主軸方位Ｎ－58°－Ｗである。平面は楕円形で、長径63ｃｍ、短径45ｃｍ、深さは29ｃｍを測る。断面は半円形を呈する。覆土はスコリアを含む黒褐色土による自然堆積層である。出土遺物はＳ字甕の体部（第13図８）が出土している。遺物から古墳時代前期に比定される。

第Ⅳ章　遺　物

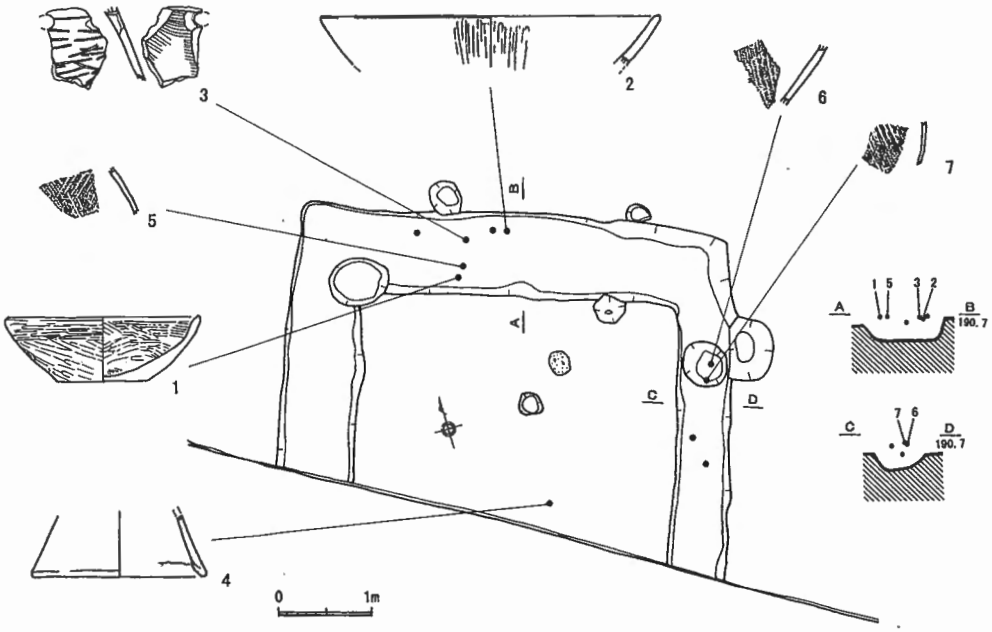
峯石遺跡の特質を述べたいため、Ⅱ次調査で出土した遺物（第13図１～16）と共に、確認調査の出土遺物（第13図17～23）も報告する。

今回のⅡ次調査では遺構内から出土したものは１～８で、遺構外出土遺物は９～16である。このうち遺構内出土遺物の内訳は、１～７がＳＢ０１で、８がＰ３からの出土である。

１は小型の鉢で、なだらかに内湾状に立ち上がる器形である。外面口縁部にはヨコ方向に丁寧なヘラミガキが施され、口縁下の胴部から底部にかけて斜め方向にヘラミガキが確認できる。内面はハケメで成形されたあと、斜め方向にヘラミガキが施されている。底部の器壁は他の部位より薄い。２は高坏の口縁部である。推定口径は18ｃｍを測り、内外面タテ方向にヘラミガキを施す。３は破片だが、脚部外面に横方向で細い原体によるヘラミガキが施されている。内面はハケメが認められ、円形の透かし孔がある。器種はヨコ方向にヘラミガキが施され、裾に向かって緩やかに広く開く特徴から、器台と思われる。在地の土で焼成されているが、細い原体で忠実にヘラミガキが施されている点、畿内地域の技法が強く影響されている。４～７は在地産Ｓ字甕の範疇にくくれるものである。４は脚部である。脚が直線的に開き、底径は推定で９ｃｍを測る。５は肩部でヨコハケメが認められる。６・７は胴部である。粗いハケメが施されている。７は外面に煤が付着している。



第13図　出土遺物実測図（１：３）



第14図　ＳＢ０１遺物出土状況図（１：80）出土遺物（１：４）

８はＰ３から出土したＳ字甕の胴部である。焼成はやや軟質で、粗いハケメが施されている。

９～16は遺構外からの出土である。９・10はＳ字甕の口縁部である。10は屈曲が外方へ大きく開く。11・12はＳ字甕脚部である。11は直線的に開き、外面に斜め方向にハケメが認められる。12にも斜め方向にハケメが施されている。13は台付甕の胴部で脚部に近い部位に当たる。脚部との接合剥離痕が確認できる。外面は細かい原体を使ったタテハケメが施されている。14はＳ字甕肩部である。１条のヨコ櫛描が施されている。15は縄文土器深鉢の口縁部破片である。焼成は堅致で沈線がめぐらされており、この特徴から、縄文時代後期の堀之内式と考えられる。16は瀬戸美濃産の壷である。外面はやや発色不良な鉄釉が施されている。時期は17世紀後半から18世紀の初頭にかけてのものである。

17～23は確認調査からの出土遺物である。17は小型の鉢である。確認調査１トレンチの竪穴住居と考えられる遺構で出土した。口径9.5ｃｍ、底径4.4ｃｍ、器高7.7ｃｍの法量を測る。口径が体部径より、やや大きい器形である。口縁端部を面取りし、粗いハケメで仕上げている。胴部内面のハケメの幅は広く、他の部位に施した幅狭のハケメと異なることから、2種類のハケメ原体で成形したことがわかる。また、底部において、若干ドーナッツ状に周りを高くする窪み部分が認められる。18～20はＳ字甕の破片である。18は口縁部で口唇部内面を浅い沈線がめぐらされている。19は胴部で外面にタテ方向に粗いハケメが施されている。20は肩部破片でヨコハケメが確認できる。21は縄文土器体部破片で焼成はやや軟質である。半裁竹管で条線状に施文されており、縄文時代中期前半の年代と考えられる。22は瀬戸美濃産の双耳壷である。口唇部が若干肥厚しており、内外面に鉄釉がかけられている。肩部の位置に一条の櫛描をめぐらせ、同じ位置に耳のつまみを貼付している。時期は18世紀前半に比定される。23は瀬戸美濃産大窯製品の皿である。内外面に鉄釉が施され、底部外面は錆釉がかけられている。削りだし高台で仕上げられており、時期は16世紀後半にあたる。

遺物の出土状況を述べれば、全体の出土量は多くなく、遺構密度の希薄さと比例している状況である。そのなかでＳＢ０１からの出土遺物は明確に抑えることができた（第14図）。先のＳＢ０１の遺構説明で

も述べたが、出土遺物の多くは図化した４以外、住居下部掘り方上の位置から出土している。ただし掘り方の底部から出土したものは1点もなく、掘り方直上からか、削平でかなり薄く残された床面からの出土が考えられる。器種構成は鉢、高坏、「器台」、Ｓ字甕と豊富で、年代は古墳時代前期にあたる大廓Ⅲ式期と考えられる。

No.	出土地点	器種器形	口径	底径	器高	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SB01	鉢	(10.1)	(5.0)	3.4	砂粒少し含む	やや軟	淡褐色	1/2	
2	SB01	高坏	(18.0)			精良	良好	淡褐色	口縁 1/8	
3	SB01	器台か				精良	良好	褐橙色	破片	
4	SB01	甕		(9.0)		砂粒含む	良好	褐灰色	脚 1/8	S字甕
5	SB01	甕				砂粒少し含む	良好	褐色	肩部破片	S字甕
6	SB01	甕				砂粒少し含む	良好	淡褐色	体部破片	S字甕
7	SB01	甕				砂粒少し含む	やや軟質	褐色	体部破片	S字甕 外面スス付着
8	P3	甕				砂粒少し含む	やや軟質	淡褐色	体部破片	S字甕
9	F1 グリッド	甕				砂粒少し含む	良好	橙灰色	破片	S字甕
10	遺構検出時	甕				砂粒少し含む	良好	橙灰色	破片	S字甕
11	遺構検出時	甕				砂粒少し含む	良好	褐灰色	破片	S字甕
12	F1 撹乱土中	甕				砂粒少し含む	やや甘い	橙褐色	破片	S字甕
13	遺構検出時	甕				砂粒少し含む	良好	褐灰色	破片	台付甕
14	F2 グリッド	甕				砂粒少し含む	やや軟質	淡褐色	肩部破片	
15	F1 撹乱土中	深鉢				砂粒含む	良好	赤褐色	口縁破片	縄文土器
16	撹乱土中	鉢				精良	良好	灰色 釉:褐灰色	底部 9/10	近世陶器
17	1tr 竪穴状遺構	鉢	9.5	4.4	7.7	砂粒少し含む	やや軟	橙灰色	2/3	
18	2tr	甕				砂粒少し含む	良好	褐灰色	破片	S字甕
19	2tr	甕				砂粒少し含む	良好	褐色	体部破片	S字甕 外面スス付着
20	3tr	甕				砂粒少し含む	やや軟	淡褐色	肩部破片	S字甕
21	2tr	深鉢				石英含む	やや軟質	灰褐色	体部破片	縄文土器
22	3tr	小壺	(9.0)			精良	硬質	釉色:褐色	口径 1/4	近世陶器
23	7tr	皿		0.0		長石粒少し含む	硬質	釉色:褐色	底部 1/4	瀬戸美濃大窯製品

表２　土器観察表

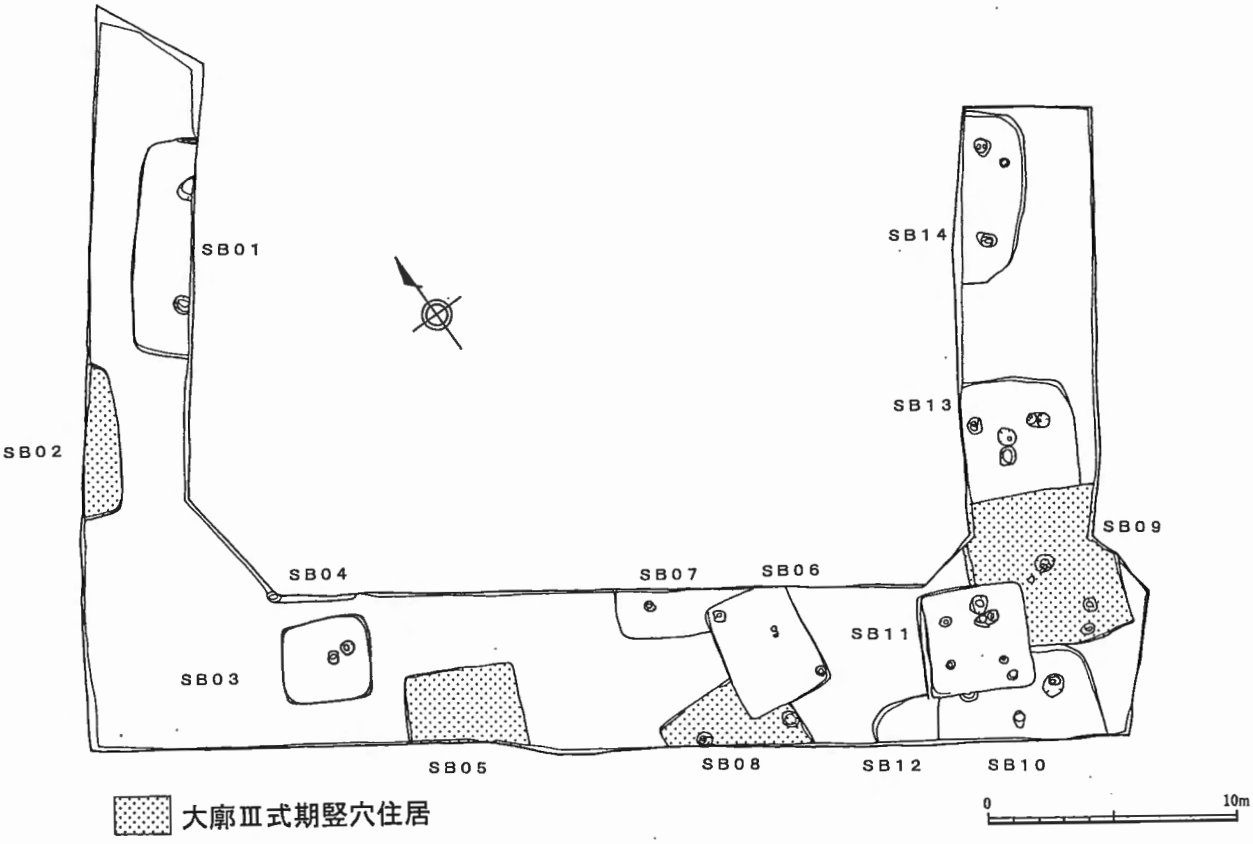
第Ⅴ章　ま　と　め

峯石遺跡Ⅱ次調査では、竪穴住居１軒、掘立柱建物１棟、２条の溝が検出された。Ⅰ次調査の結果とは異なる様相となり、以下に検証したい。

唯一の出土遺物が確認されているＳＢ０１では、土師器の鉢、高坏、Ｓ字甕が出土している。概観すると、Ｓ字甕は全て在地型のものであり、小型鉢、器台はヨコミガキ技法から畿内地方の影響がうかがえ、出土遺物が少ない割には興味深い結果となった。遺跡の年代を決める要素も鉢、器台のヨコミガキ技法からで、胎土は在地だが、畿内に影響する技法の伝播時期が、大廓Ⅲ式期とみられ、住居の年代もこの時期にあたる。

近隣の遺跡の類例を調べると、神祖遺跡（第15図）では大廓Ⅲ式期に該当するＳＢ０５の出土遺物から畿内系の壷が出土しており、丁寧なヨコミガキが施されている。また、ＳＢ０９で粗製の小型鉢や底部穿孔の壷など特殊な土器類の出土が報告され、今回ＳＢ０１で出土した鉢、器台や確認調査での小型の鉢の事例と様相を同じくする。さらに神祖遺跡の大廓Ⅲ式期にあたる竪穴住居の平面プランは、方形のコーナ部分が直角に指向しており（富士宮市教育委員会2009 a)、今回の住居平面プランと共通性が見出せる。

市内に視点を広げれば、潤井川流域に注意が必要である。大廓Ⅲ式期に併行する東田遺跡ＳＢ０９からの出土遺物は示唆的である。在地型のＳ字甕とともに布留甕の搬入品が共伴しており、畿内の影響がうか



第15図　平成20年度神祖遺跡調査遺構模式図（１：300）

がえる（富士宮市教育委員会2009 b)。東田遺跡は、潤井川左岸の微高地に展開する集落で、庄内甕や銅釧、銅鏃が出土している拠点集落の泉遺跡と相互に関連して広範な遺跡群を形成している。また潤井川よりやや奥まった星山谷に所在する大廓Ⅲ式期の月の輪平遺跡１号住居址出土遺物は、在地型Ｓ字甕を中心に外来の影響を受けない駿河地域の典型的な標識資料である。月の輪平遺跡は丘陵前面に長期にわたって展開する竪穴住居群で形成されるが、農業生産に不向きな土地から中心的集落とはいえない遺跡と考えられている。このことから、外来のヒト・モノが行き交う要衝地東田遺跡の拠点的集落から、月の輪平遺跡のように伝統的生活様式を営む集落まで、潤井川流域の古墳時代前期は多様性に富んでいる。

今回の峯石遺跡Ⅱ次調査で、表採遺物だけの古墳時代認識に留まったところに、大廓Ⅲ式期のＳＢ０１が検出された意義は大きい。同時に、検出された立地そのものが、隣接する丸ヶ谷戸遺跡の関係について看過できなくなる。丸ヶ谷戸遺跡は、26.2mの前方後方型周溝墓に代表されるように、首長層が眠る中心的な墓域である性格は揺らぐことがない。その首長墓を見下ろす景観に大廓Ⅲ式期になって住居が営まれる意味は今後の課題だろう。また問題の所存に首長層の居館がどこに構えていたかも抵触される。現況では、東田、泉遺跡の潤井川沖積地や、峯石遺跡の南に位置する神祖遺跡が有力な候補地としてあげられる。今回の調査成果は、峯石遺跡が、豪族居館有力候補地の一角である神祖遺跡と、畿内的要素や特殊な土器で相互関係が示された点にあろう。

次に掘立柱建物は、重複関係のない検出で、時期の決め手に欠け、本来は時期不明といわざるえない。あえて年代を言及すれば、遺構の構造から柱の平面形は円形で、径20～36ｃｍの間に集約され、現状の畑地形に則した建物軸を振っている。それとともに調査区表採遺物に近世の陶器（第13図16、22）と中世末の瀬戸美濃産大窯製品（第13図23）が採集されていることから、中近世と推測している。

近隣の遺跡と対比すると、丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ次調査で検出されたＳＢ６の事例があげられる。（富士宮市教育委員会2001）この掘立柱建物は西となりにある竪穴住居に削られており、梁行300ｃｍ、桁行630ｃｍを測る１間×３間で、主軸はＮ－15°－Ｅと、周辺の竪穴住居主軸とは異なる方位を示している。時期は竪穴住居の切りあい関係から大廓Ⅰ式期と見られる。今回の掘立柱建物と比べ時期的な乖離はあるが、今後の比較検討課題として捉えたい。

峯石遺跡に古墳時代前期、「中近世」の要素が新事実で発見され、従来の縄文時代前期、奈良時代の要素に加えて、より重層的な形で浮かび上がったことは富士宮市の地域史にとって大きな進展であろう。

《文献》

富士宮市教育委員会2009 a『神祖遺跡』
富士宮市教育委員会2009 b『東田遺跡』
富士宮市教育委員会2001『丸ヶ谷戸遺跡Ⅱ』

報告書抄録

ふりがな	みねいしいせきに
書名	峯石遺跡Ⅱ
副書名	㈱駿河勧業開発による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書
シリーズ番号	第44集
編著者名	保竹貴幸　田中城久
編集機関	富士宮市教育委員会 富士山文化課
所在地	〒418-8601　静岡県富士宮市弓沢町150番地　TEL0544-22-1111(代)
発行年月日	平成24年(2012)6月30日

遺跡名(いせきめい)	所在地(しょざいち)	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
峯石遺跡(みねいしいせき)	富士宮市大岩字峯石910番(ふじのみやしおおいわあざみねいし)	22207	市番号 38 県番号 84	35°14′09″ 138°38′02″	20110921 ～ 20111014	約175	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
峯石遺跡	散布地	古墳時代前期 時期不明	竪穴住居 掘立柱建物	土師器 縄文土器 陶磁器	

富士宮市文化財調査報告書　第44集

峯石遺跡Ⅱ

㈱駿河勧業開発による宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年6月30日

編集　富士宮市教育委員会
発行　富士宮市教育委員会
〒418-8601
静岡県富士宮市弓沢町150番地
(0544) 22-1111(代)
印刷　三扇美術印刷株式会社
〒418-0056
富士宮市西町1番15号
(0544) 26-3636(代)

写 真 図 版

図版 1

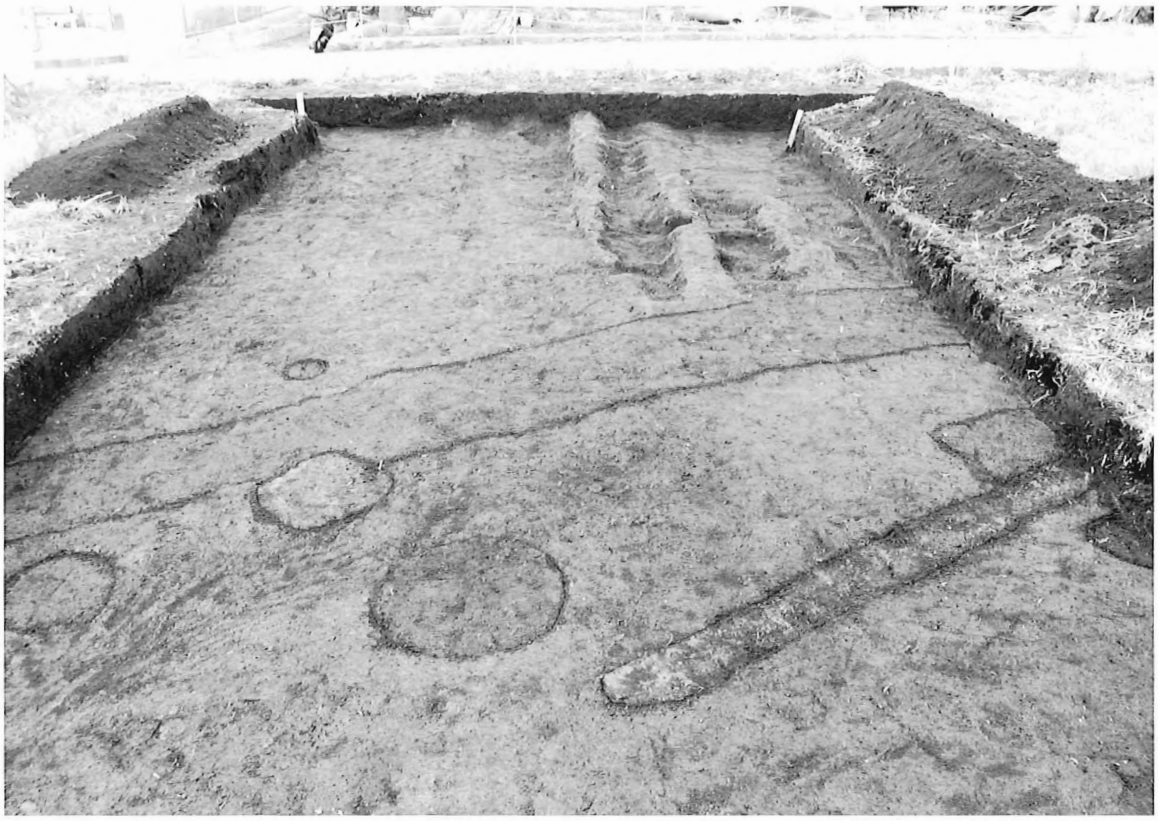


写真 1 SD01・02 検出状況（東から）

写真 2 SH01 検出状況（南から）

写真 3 SD01・02、SK01 完掘状況（南から）

写真 4 SH01 完掘状況（東から）

図版 3

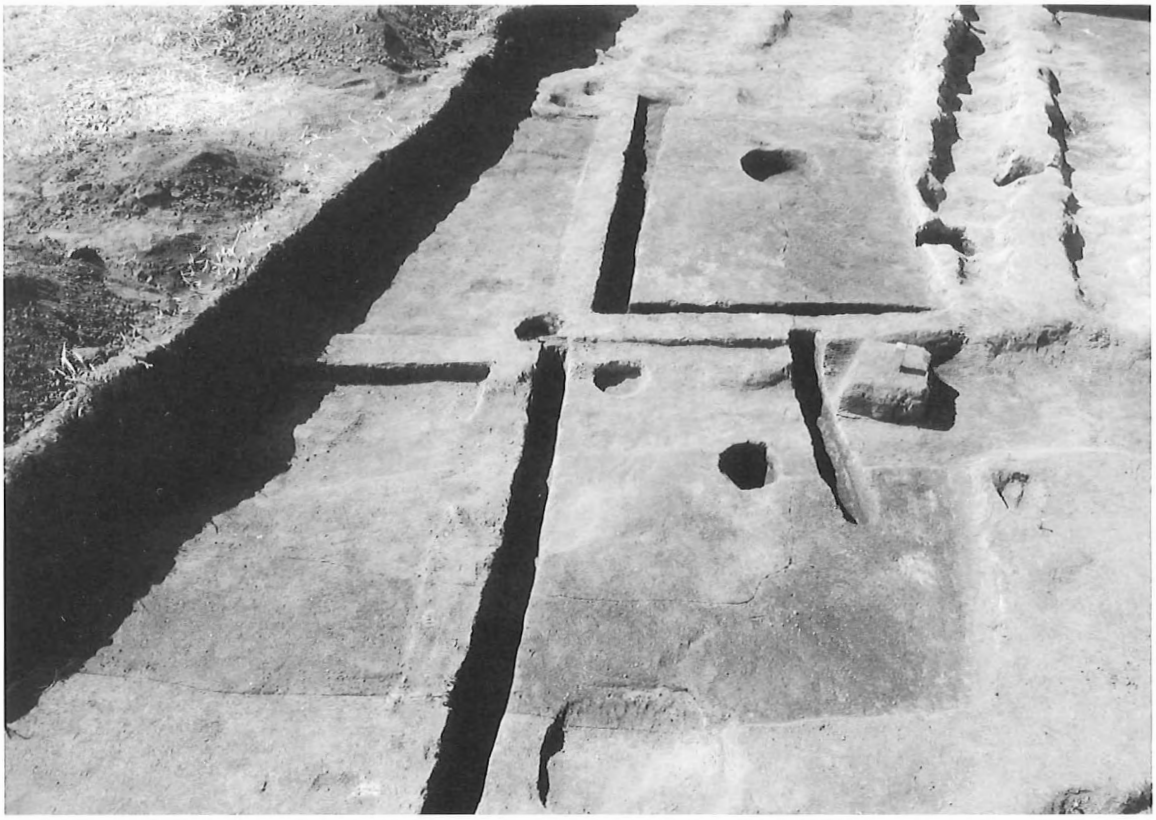


写真 5 SB01 検出状況（東から）

写真 6 SB01 完掘状況（東から）

写真７ SB01 完掘状況（南から）

写真８ 調査区遺構 完掘状況（西から）

図版 5

写真９ 出土遺物①（1）

写真10 出土遺物②（17）

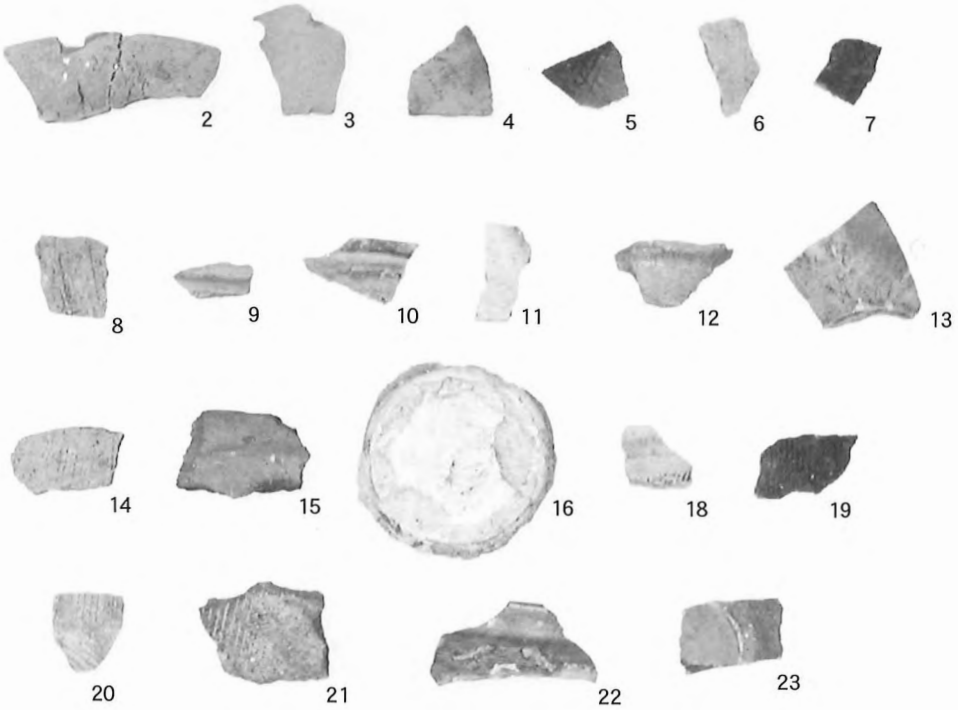


写真11 出土遺物③